

山本有三集

26

現代文學大系

山本有三集

現代文学大系 26 山本有三集

昭和三十九年一月十日発行

著 者 山本有三

発行者 古田晁

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二二三

装 幀 真鍋博

本文用紙 三菱製紙株式会社
表紙クロス 東洋クロス株式会社
本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

山本有三集

26

現代文學大系

現代文学大系 26 山本有三集

昭和三十九年一月十日発行

著 者 山本有三

発行者 古田晁

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二二三

装 幀 真鍋博

本文用紙 三菱製紙株式会社
表紙クロス 東洋クロス株式会社
本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

山本有三集

行介(コースケ)はいつもの停留所でおりました。おるとき、帽子に手をやらなくてはならないほど、風が強かった。

彼は赤い茶けた風に押されて歩いて行った。ときどき、紙くずや、こつばなぞが、トンボがえりをしながら、彼のズボンのあいだをすりぬけて、ころがって行った。

行介はオーバーのえりを立てていたけれども、それでも、カラーの下まで、つめたい空気が流れこんできた。そのうえ、どうかすると、クギでも投げつけられるように、お粒の砂がパラ／＼と、彼のえり首に落ちてきた。

彼は、横丁にはいいたら、いくらか風がよけられるだろう、と思った。急いで、うちのほうへ曲がる最初の横丁を曲がった。しかし、しばらくしてから、「きょうは寒いから、婦りに肉でも買ってこよう。」けさ、出がけに、妻

にそう言ったことを思い出した。

そうだ。肉を買って行ってやらなくては。彼は、また電車どおりに引返して、突きあたりの肉やにはいった。

板まきが肉を切っているあいだ、行介は厚いマナイタの前に突っ立って、ホーチョーの動くさをぼんやり追いかけていた。なま肉のにおいが鼻を打って、彼の胃ぶくろを波だたせた。

マナイタの上に斜に落ちているゆう日が、鋭い刃ものにあたって反射すると、ちようど油でもはねた時のように、天じょうや、肉をぶらさげである大きなガラス戸ダナに、きらつ、きらつと、ちいさい光をはねかせた。

突然、ふわっとしたものが、ひざのあたりにからみついた。彼はびっくりして下を見た。ふる新聞が風に吹きまわられて、飛んできたのだ。なんのことはない、木の根かたに落ち葉が吹き寄せられるように、彼の足もととは、一時の吹きだまりになったのだ。

「こんなところに突っ立っていると、ざまがないや。」

心の中でつぶやきながら、彼はいま／＼しそくに新聞を往来にけとばした。しかし、べつとりと張りついたようになつて、ふる新聞はなか／＼足から離れなかつた。彼はしかたがなしに、ほこりだらけの紙を指でつまんで、かざしにも放してやった。ぼろ／＼に破れた、大きな紙きれは、また往来をころがって行った。

肉やの店さきに立つたびに、いつも思うことだが、どう

も、この、待っているあいだぐらい、まの悪いものはなかつた。

板まえば切った肉を竹の皮の上に薄くのぼして、丁寧にならべていた。それから、ハカリの上に乗せて、少しばかりの肉をたしたり、へらしたりしていた。行介はお預けをくった犬のように、黙ってそれをながめていた。

「見並(ミナミ)君。」

肩のところで声がした。ふり向くと、丸い顔が笑っていた。園田(ソノダ)だった。

行介はちょっとしよげたが、向こうが笑っているのので、彼もてれ隠しに、ほゝえんで見せるよりほかはなかった。

「ごちそうだな。」

「いやあ、とんだところを見つかっちゃったな。」

一ノ二

「あい変わらずだね。」

園田の顔には笑いがまだ残っていた。

「何があい変わらずだい。」

行介はおつかぶせるように言った。「あい変わらずのろいね。」「あい変わらず女房孝行だね。」「あい変わらず……」園田のあい変わらずに負けていたら、どんなことになるかわからないと、思った。

「いや、あい変わらず気がきいてるってんだ。」

「ふん。」

「おれがくることを察して、牛肉を買っておこうなどは、感心だよ。」

「たぶん、そうくるだろうと思っていた。おい、心配しなくてもいいよ。君にはコマ切れを買っておいた。」

「コマ切れ、コマ切れか。」

「何を言っているんだい。みっともない。」

「おい。——女房にコマ切れを買って帰りけり。ってのは、どうだい。」

「どうもうるさくってかなわないな、迷句をひねくるやつが、そばにいと。」

「しかし、実感があってなか／＼いいだろう。」

「うん、たび／＼コマ切れを買いつけてると見えて、その点はさすがだね。」

「まだあんなことを言ってやがる。もういい加減に降参しろよ。」

「はゝゝゝ。」

「お待ち遠さま。」という声が響いた。そして、竹の皮づつみが行介の前に突き出された。彼はそれを受け取ると、園田とつれ立って肉やの店を出た。

「だが、ぼくがあすこにいること、よくわかったね。」

「なあに、君の姿は三丁もさきからわかっていた。」

「どうして。」

「ぼくはこの道をやってきたんだもの、つきあたりの店に、君の丸まった背なかが出っぱっていりゃ、いやでも目につ

くじゃないか。おれは道々考えてきたんだが、どうもなんだね、ネコ背ってやつは、なか／＼句になりにくいね。」

「バカにするな。じゃ、君は、ぼくのところへ行ったのかい。」

「うん、もう帰っているころだと思って。」

「それなら、待っていてくれればいいのに。」

「おれもそうしようと思つたんだが、だれもいなかったもんだからね……」

「かまやしない。あがりこんで待ってりゃいいじゃないか、ほかのうちじゃあるまいし。」

「ところが、戸がしまっているんだ。引っぱってみたけれど、あかなかつたから、しかたがない、帰ってきたのだ。」

「そうか、そりゃ失敬した。じゃ、女房、どつかへ買い物に出たんだろう。」

きょうは土曜日だし、ちようど園田もやってきたところだから、久しぶりでひと口やりたいと思つて、行介は途中、取りつけのさか屋に寄つて酒を頼み、うちに帰つた。うちは、園田が言うように、戸がしまっていた。妻はまだ帰っていないらしい。彼は裏ぐちにまわつて、あま戸のかけ金をはずした。

一ノ三

なかはまっ暗だった。

行介は手さぐりで電燈を探し、スイッチをひねつた。そ

れから、急いで玄関に行つて、格子(コーシ)とあま戸をあけた。

「いや、お待ちどお。」

「ほんとうにお待ち遠さまだ。なんだね、肉やのマナイタの前に立たされるのも、いい図じゃないが、戸のしまつたうちの前に、ちよこなんと突つ立つてるのも、あんまりありがたいもんじゃないね。」

園田はへらず口をたゝきながら、あがつてきた。

行介は、なが火バチの横にすわろうとすると、煮えたぎつた鉄ビンが、重たいフタをバタリ／＼押しあげているので、彼は立つたまま、あわてて鉄ビンをわきにおろした。

「戸じまりをして、外に出て行くくらいなら、火をいけて行けばいいのに。」腹の中で、彼はるすの妻にこごとを言つた。

しかし、じつを言うと、赤々とおこっている火は、吹きつつあらしの中を、冷えきつて帰つてきたからだには、この上もなくうれいものだった。ふたりは火バチの上に手をかざしながら話し合つた。

園田がやってきた用むきは、金のことだった。まだ来月と思つていた細君のお産が、急におとゝいあつたものだから、てんでこ舞いをしてしまった。で、五十円か、三十円ばかりほしい、と言うのだった。ふたりは、しよ／＼ちやうこのくらの金を貸したり、借りたりしている仲だった。

園田はずばらのように見えて、案外かたい男で、金銭でま

ちがいのあったことはなかった。ことにおもしろいのは、それを返しにくるとき、味の素だとか、塩せんべいだとか、その利息に相当するくらいのを、いつもきつと持つてくることだった。行介も、借りたときは、やはりそうすることにしていた。

園田の話は事情が事情だし、それに、ちょうど三十円ばかり手もとにあったから、さっそく用だてることにした。行介はその話が一段落つくと、台どころに立って行って、ネズミイラズだの、戸ダナだのを、しきりにガタビシいわせた。

「何を見つけてるんだい。」

「おかしいな。どこへしまいかんじまったのかしら。どうも女房がいないと、しょうがないな。」

「おい、ごちそうなら、また、ゆっくりなりにくるよ。」

「まあ、そんなことを言わないで、ぼくがせっかく買ってきたんだから、肉を突っ突いて行けよ。」

「しかし、奥さんがいないところだからね……」

「きょうはバカに遠慮するじゃないか。」

「そういうわけでもないが、金を借りたり、ごちそうになつたりしちゃう、少し話がうま過ぎるからな。」

「いやなことを言うやつだな。そんなことを言ってるひまに、いいから酒でもつけといてくれよ。」

今しがた小僧が持ってきた酒のトツクリを、園田の前に押しやった。

「驚いた。細君が　るすだと、おれのほうにまで雷がおつこつてくる。」

「つまらないことを言うなよ。」

「しかたがない。細君が帰ってくるまで、おかん番をつとめてやろう。」

「それだ。恩をきかせてから飲もうってんだから、君は太い料けんだよ。」

「なに、そんなことはありゃしないが……」

「ナベ、ナベ、ナベと。いったい、どこへ入れちまやがったのかな。」

「なんだい、牛ナベかい。」

「うん、困ったな。こゝになければと——」

「そのぐあいじゃ、こゝのうちでは、めつたに牛肉なんか食わないと見えるな。」

「飲まないさきからその調子じゃ、飲んだら何を言いだすかわかりゃしない。」

「おい、いったい、そんなに飲ませるつもりかい。」

「すぐそんなことを言う。だから、酒のみはいやしいうてんだよ。」

「そうものをはつきり言うもんじゃない。酒がはいらないうちに、まっかになってしまふじゃないか。」

一ノ四

「へんなもんだな。自分のうちでいながら、台どころとき

「たら、どこに何があるんだか、さっぱりわかりやしない。」
 「實際なんだね。さういふときは、さほどにも思わないものだが、いらないとなると、これで、不自由なものだね。」

「おい、つまらない親切なんか、よしてくれよ。」

「だが、そういうもんじゃなにか、いったい、細君なんてものは……」

「あった、あった。なあんだ。こんなところに突っこんであったんだ。」

米ビツの横に二寸ばかりあきがある、その狭いあいだに、牛ナベはむき出しのまゝ立てかけてあった。

「そうか。じゃ、いよ／＼君のしいれてきた牛肉にありつけるわけだね。」

「今までは、どうなることかと案じていたって、言やしないか。は／＼、さあ、これでネギさえあれば、文句はないぞ。ところで、ネギはと……」

行介は台どころのあげ板を開いて、下をのぞいた。暗いなか白く光ったものが十本ばかりそり返っていた。彼はそれをみんな取り出して水で洗い、あぶなっかしい手つきをしながら、ザクリ／＼切りはじめた。

こうしてネギが買つてあるところを見ると、妻は彼が肉を買つてくることを、忘れているものとは思えない。しかし、今もって帰つてこないというのは、どうしたわけなのだろう。彼の帰つてくる時間は充分承知のはずだし、それによつてその時刻に、うちをるすにすると、いうようなことは、

今までに、ついでなかつたことだけに、行介はホーチヨを動かして、いながらも、考えは絶えずそこに走っていた。

「おい／＼、カフスがぬれるよ。」

園田の声で、行介の考えは断ち切られた。

「洋服を着かえたらいいじゃないか。」

「いや、めんどくさい。もうじきだよ。」

「それじゃ、細君のエプロンを前にかけるんだね。そうして、ついでに、あたまに白い帽子をのつけるんだ。」

「バカにするな。」

「おい、新まえのコックさん、指を切らないように頼むよ。」

「大丈夫だよ。だが、こんなことをしていると、君と自然して、いたころが思ひ出されるね。」

「あのときもさ、君はよく指を切ったぜ。おかげで、ぼくは、なんど血ぞめのタクアンを食わされたかしれやしない。」

「しかし、君がいくらかでも血のめぐりがよくなったのは、あれからだ、と思や腹も立たないだろう。」

「へん、あきれてものも言えやしない。——そろ／＼おチヨシをつけ始めようかね。」

「なんだい。まだやらなかつたのかい。」

「まだやらなかつたかつて、牛ナベが見つかからないうちから、おかんをしちゃ、つき過ぎちまうじゃないか。」

「なるほど、大きにそうだね。——おい、トックリは茶ダンスにはいっているぜ。」

「如才はないよ。もうちゃあんと出してある。」

園田はトックリに酒を移して、しずかに鉄ビンのなかに沈めた。

「え、君。この、ポチャリーという音は、なんとも言えないね。」

「そうだね。」

「そうだねは、話せないな。なんじゃないか、芝居で言や、これは幕あきの木みたいなものだ。こいつがポコリだの、ポチャリだのときた日には、酒の味はなくなっちゃうからね。おれは女房にだって、こいつばかりは任せはしないよ。」

——女房ってば、奥がたはバカに遅いじゃないか。」

一ノ五

「女房なんかいなくなつて、かまやしないよ。さあ、できた。」

行介は切ったネギをサラにもつて、洗った牛ナベといっしょに茶のまに運んだ。

やがて、肉がジューク／＼煮えだして、火パチの上は急に活気づいてきた。

「酒もついたし、肉も煮えてきたし、もう、なんにも言うところはないや。」

二、三杯ですぐとろんとしてしまふ行介は、目がねの曇りを気にして、度の強い近眼鏡をはずし、息を吹きかけては、しきりにハンケチでふきはじめた。

「これで女房さえ帰ってくりゃ、だろう。」

園田はゆるやかに、杯をくちびるのところに持つて行きながら、少し目じりをさげて、行介の顔をのぞいた。

「なあに、女房なんか、どうだっさいいさ。」

「なんとか言ったら。」

「全くだよ。」

「そんなことを言うと、向こうじゃ、もう帰ってまいりませんよ、と言ってくるぞ。」

「ところが、そんなのとはちがうんだからね。」

「あきれた。こりゃ手ばなしだ。」

「まあ、なんにもありませんけれども、どうか充分めしあがってください、って、ところかね。おい、君。こっちのほうで煮えているぜ。」

「おれはもうたくさんだよ。おらあ帰るよ。バカ／＼しい。」

「さようでもございましょうが、これは手まえが買ってまいった肉でございませし、こちらは手まえが刻んだ……」

腹の底には何かつめたいものがよどんでいながら、行介はへんにはしゃぎたかった。しかし、冗談を言っているうちに、自分でも空しくなつて、途中で急にやめてしまった。

園田は帯のあいだから時計を出した。行介はそれを見ると、おどすように、

「おい、帰るのはまだ早いぞ。」

「う、うん。」なま返事をしながら、園田はなお時計をながめていた。

「もう少ししろよ。」

「う、うん。——しかし、遅いな。」

「まだ、そんな時間じゃないだろう。」

「いや、奥さんがさ。——買い物にしちゃ、少しおそ過ぎるじゃないか。」

「……………」

「どこへ行ったか、心あたりはないのかい。」

「そうだね。」

「おい、隣へ行って聞いてこいよ。ちよっとお尋ねいたしますが、手まえどもの家内はどこにまいましたらううって。」

「なんだ。本気にしていると、すぐちゃかしやがる。」

「しかし、ほんとだよ。何かことづけがあるかもしれないぜ。」

「いいよ。女房なんか、いたって、いなくたって。君さえいれば。さあ、一杯いこう。」

「おい、おれを女房と取っちがえちゃ困るよ。ぼくは奥がたが帰ってくりゃ、立ちどころに引き取ろうって人間なんだからね。」

「そう帰る／＼っておどかすなよ。」

「いや、そういうわけじゃないけれど、なにしろ、うちのほうがなんだからね……………」

「あ、そうか。はゝゝゝ。——そんなに子どもってかわいもんかね。」

一ノ六

「まあ、持ってみろよ。」

「いやにおやじぶるな。」

「しかしね、君……………」

「驚いたな。これが当年の園田だと思うと。」

「まあ、なんでも言うがいいさ。人間、子どもを持たないうちは、まだ人生の半分しかわからなんだよ。その意味で、君なんかは半人まえぐらいの値うちつきりないんだぜ。結婚して、まだやっと一年だろう。」

「おい、はじめておやじになったって、そう威ばるなよ。」

「いや、べつに威ばりゃしないが、なんだよ、君、子どもってものは……………」

「子ども、子どもって、そんなに珍しがることはないじゃないか。ぼくなんか、子どもなら、なんにんでも持っているよ。」

「なんにんでも？」

「うム。」

「おい、ほんとうの話かい。」

「ほんとうさ。学校へ行けば、子どもなんかうよ／＼している。」

「なあんだ。小学校の生徒か。君はたちが悪いよ。すぐ

人をおつかうから。」

「いや、かついだんじゃない。まじめな話だ。」

「バカくしい。学校の子どもなんか、なんにんあつたつて、しかたがないじゃないか。」

「そんなことないさ。」

「いや、君がなんと言つたつて、他人の子じゃだめだよ。

自分の子でなくつちや。どうも、小学校の先生なんて、しょうがないね。こんなことが、わからないんだから。」

「何がしょうがないことがあるものか。自分の子だの、他人の子だのと、区別をつけるようじゃ、学校の教師はつとまらないよ。」

「そりや教壇に立つた時の話だ。まあ、自分の子どもを持つてみるよ。どんなもんだか。」

「いや、そんなものは当分まっぴらだね。」

「は、は、は、は。實際、女房さえ食わせられないんだからね。」

「おや、もう九時になる。こりや驚いた。君、すまないが、ぼく、失敬するよ。なにしろ、赤んぼうと産婦とおきっぱなしなんだからね。」

「そうか。そりや悪いことをしたな。あんまり引きとめちゃつて。」

「なあに。じゃ、奥さんが帰つたら、どうかよろしく。」

「近いうちに、赤ちゃんを見せてもらいに行くよ。」

「うん、是非やつてきてくれたまえ。」

園田が帰つたら、家のなかは急にひっそりとしてしまった。行介はつまらなそうに、食器の取り散らされているなかに、ごろりと横になった。そして、今まで園田がすわっていた座ぶとんを、寝たまま腕をのぼして引っぱり寄せ、二つに折つて、あたまの下にあてがった。

牛ナベは、つゆが切れたとみえて、ジイ／＼火バチの上でうなつていた。焦げつくような異臭が鼻を突いたけれども、彼は起きあがろうともしなかった。

そのとき、裏のほうで何かガチャガチャーンというはげしい音がした。妻が帰つてきたのか、とも思ったが、それにしては、少しするど過ぎる物おとだった。隣の物ほしザオが吹き落とされたのかもしれない。外はあい変わらず風がひどいらしい。

一ノ七

行介は突然むっくり起きあがつて、自分の机のところに行つた。彼女は急な用事でもできて、外出したのかもしれない。何か書いたものがおいてありやしないか。彼はそう思つて机の上を調べたけれども、いや、引きだしの中まで調べたけれども、それらしいものは見あたらなかった。

いったい、きぬ子はどこへ行ったのだらう。彼にはまるで見当がつかなかった。園田が言ったように、實際、隣へ行つて聞いてみようか。しかし、それもあんまり気がきかな過ぎる。第一、何かことづてがあつたくらいなら、さつ

き、裏ぐちをあげるときに、隣のおかみさんはおむつを干していたのだから、あのとき、ちょっと言ってくれそんなものだ。黙っていたところをみると、隣にも、なんにも言つて行かなかつたものに相違ない。してみれば、そう手まの取れる用事とも思えない。それなのに、時計はもう九時を過ぎてゐる。

どうかしたら、また、おやじが……

きらつとその考えがきらめいたが、行介は強くそれをうち消した。いくらなんでも、また、おやじがそんなことをしようとは考えられなかつた。近ごろは非常におとなしくなつてゐるようだし、ことに、ふたりの結婚を心から喜んでいたことは、彼にもはっきり見えていたのだから……

あるいは、だれかに誘われて、活動でも見に行つたのだろうか。いや、るすにそんなことをする氣づかいはない。見に行くなら、彼が帰つてきてから行つても、充分まに合はずだ。

行介は今始めて知つたように、あわてて牛ナベを火バチからおろした。ネギがまっ黒になつて、ナベにこびりついていた。

彼はチャブ台のそばにおいてあつたさか屋のトックリを引き寄せた。振つてみると、まだいくらか残つてゐるらしい。彼はついでは飲み、ついでは飲み、ありつたけ飲んでしまつた。ひや酒が妙にはらわたにしみ渡つた。

大きなあくびをして、彼は腕をのばした。からだかひと

く窮屈だな、と思つたら、洋服を着かえてないことに氣がついた。

彼は大儀そうに立ちあがつて、タンスの前に行つた。そこには、着がえがちゃんと畳んであつた。彼は妻の心をうれしく思いながら、洋服をぬいで、ふだん着に着かえた。しかし、うしろから着せかけてくれる、やさしい手のないことが、ものたらなかつた。

それから、クツ下をぬいでタビをはこうとすると、足のさきは何かカサリとさわつたものがあつた。彼はごはん粒を踏みつけた時のような、いやな氣もちがした。

「本んだあも。タビのなかに。」

彼はへんな氣がしながら、タビを裏がえして振つてみた。四角い、桃いろのものが、こぼれ落ちた。

封筒だつた。おもてに「先生さま、裏にナキぬ子」としてあつた。

バカなことをしたものだ。タビの中に手がみを入れておくやつもないものだ。と、彼は思った。しかし、妻がタビの中に手がみを入れておくことが、あまりに尋常でないので、行介はある恐れをいだきながら、ふるえる手で封を切つた。

一ノ八

先生、おゆるしく下さい。何もかも、あたしが悪いのです。

すっかりお話をしてと思つたのですけれど、それがあたしにはどうしてもできないんです。すみません。すみません。

先生、どうかおゆるしくください。おゆるしくください。くれぐれもおからだをお大事に。

先生さま

きぬ子

行介は手がみを読むと、一層不安になつた。ぼんやり感じていたものに、今、ゴツーンと突きあたつたような気がした。しかし、おゆるしくくださいとは、何をゆるせということなのか。お話したいことがあるのだができない、というのは、いったい、どんな話なのだろう。その点になると、彼はまた、やはり、なんにもわからなかつた。

あるいは、男でもできたのであろうか。けれども、それについて思いあたるようなことは、彼には一つもなかつた。しいて考えれば、近ごろ、いくらかさわく／＼していたと、思われるぐらいなものであつた。

ひよつとしたら、さつきもちよつと心配したようは、父おやがまた何かをたくさんだのかもしれない。あのおやじのことだから、それはやりかねないことだ。きぬ子が手がみをタビの中にそつと入れて行つたということも、おやじにけどられない用意かもしれない。

彼はそう思うと、もうじつとしてはいられなかつた。

なんにしても、あれのおやじのところに行くのが、第一だ。よし、彼がかどわかしたのではないにしても、彼のところに行けば、きつと様子がわかるにちがいない。行介は戸じまりをして、外に出た。

おやじのうちは、行介が奉職している小学校の近くだつた。お、川を越した向こうだから、かなり遠いけれども、毎日かよい慣れたる道だけに、彼はそれほどにも思わなかつた。

やがて、彼は路地の奥の、その家の前に立つた。もう寝たとみえて、中は暗かつた。ことによると、まだ帰らないのかもしれない、とも思ったが、とにかく、彼は声をかけた。

「今晚は。もうおやすみですか。」

「だれだね。」

中から、すぐ答えがあつた。おやじの声である。行介は、しめたと思つた。

「わたしです。」

「あ、あんたか。ちよつと待っておくんさい。」

あま戸のすきから急に光が流れてきたと思うまもなく、戸が開かれた。

「どうもおやすみのところを。」

「なあに。寒いもんだからね、寝どこにもぐりこんじゃあいたが、まだ眠つたわけじゃねえんですよ。——今、火を起こしますから……」